

『ゴルフとは、自らを自らで励ますこと。』



バリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

全英オープン

第148回全英オープンは、北アイルランドの名門コース、ロイヤルポートラッシュで行われた。今年マスターズで復活したタイガー・ウッズ選手や、メジャー男と言われるブルックス・ケブカ選手、さらには、松山英樹選手を中心とした日本人選手など、誰が優勝するかゴルフファンの話題を大いに盛り上げたと思う。

しかし、全英オープンは、それ以上のドラマチックな舞台を演出してくれた。優勝したのは、なんと地元出身のシェーン・ローリー選手。最終18番ホールには、何万人もの地元のファンがグリーンを囲み、髭面のシェーン・ローリー選手と同じように髭面の彼の父親が勝利を祝福した。一見、中年風にも見えるこの選手はまだ32歳。しかも、他のスポーツにおいても才能を発揮する天性のアスリートでもある。別名クラレット・ジャグとして知られている全英オープンの優勝トロフィーを持ちながら、スタンドの観衆に応える彼の姿は、アイルランドの歴史の1ページを飾ったと言ったら大げさだろうか。

4日間を通じて、最終日まで誰が優勝するかわからないのが、毎度お馴染みの全英オープンの面白さでもある。一つ間違えると、ブッシュや困難なバンカーの中に球を打ち込み、一流のプロたちでも簡単にトリプルボギーを打つ。極端な話、トップを争う二人が、イーグルとトリプルボギーを打つとすると、なんと1ホールで5打差を縮めてしまう可能性もある。

2位に入ったトミー・フリートウッドも地元イギリスの選手である。最終的には、優勝したローリーの選手との差は、6打。つまり、最終日の残り9ホールまで何が起こるか全くわからなかったところもゴルフの醍醐味を十分に味わわせてくれた。

今年は今米プロゴルフ選手権の試合のスケジュールが変更になったため、この全英オープンが4大メジャー最後の試合となった。後の楽しみはタイガー・ウッズ選手の次の勝利と松山選手の活躍、ということになるのであるが、このトーナメントを見るかぎり、イギリスをはじめとした欧州勢の実力が場合によってはアメリカ本土のツアーを席巻するのかもしれない。そして、その傾向は来年の東京オリンピックまで続き、我々の興味を引くことになるのである。

東京オリンピックは40度近い猛暑の中で展開するハードな試合になる。技術力もさることながら、体力と精神力の強い選手しか金メダルを手にすることはできない。

長い歴史を刻み、ゴルフの楽しみは、明日へと続いていく。



戸張 捷 Sho Tobari

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業(現SRIスポーツ)に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデューサー、コンサルティングなども手掛けている。